

Marie Antoinette

—伝記小説の考察—

藤 井 啓 行

Stefan Zweig の《Marie Antoinette》(1932)を一読して、この世に知られたヒロインの、後年における意外なまで毅然たる態度に感銘をうけた者、決して私一人ではあるまい。これがこの小論執筆の直接の動機であるが、巻中の年譜から、まず初めに彼女の生涯の概要を眺めておきたいと思う。

1755年11月2日	Marie Antoinette 誕生
70年5月16日	Versailles における、フランス王太子（のちのルイ16世）との結婚式
74年5月10日	ルイ15世死す スエーデンの青年貴族 Fersen, はじめて Versailles 宮に伺候
77年8月	ルイ16世夫妻はじめて親しく同衾
78年12月19日	第一王女誕生
79年	Marie Antoinette 攻撃の最初のパンフレット
81年10月22日	第一王子誕生
84年4月27日	テアトル・フランセで《Figaro》の初演
8月11日	ヴィナスの森にて、Rohan 偽の王妃と会見
85年3月27日	第二王子誕生
86年5月31日	頸飾事件の判決言い渡し
7月9日	第二王女誕生
88年	Fersen との親交始まる
89年6月3日	第一王子の死
7月14日	Bastille 襲撃

- 10月5日 パリ市民 Versailles を襲う
- 10月6日 国王一家パリに移る
- 91年6月20～25日 Varennes への逃亡
- 92年2月13～14日 Fersen, チュイルリー宮に最後の訪問
- 8月10日 暴民チュイルリー宮に乱入
- 8月13日 王権の停止。王室一家 Temple に移さる
- 9月21日 王制廃止、共和制宣言
- 93年1月21日 ルイ16世処刑
- 7月3日 王太子を Marie Antoinette から隔離
- 8月1日 Conciergerie に移さる
- 10月14日 Marie Antoinette の裁判開始
- 10月16日 革命広場において処刑

こうして今の Place de la Concorde でギロチンに斃れたとき、かつてのブルボン王朝の花、ついには《ふしだらなオーストリア女》(louve autrichienne) と世人に罵られた《寡婦カペー》は、38才であった……

昼前 Conciergerie の扉という扉がすべて開かれる。外には、刑場へ彼女のからだを運ぶ皮剥人の車がとまっている。両手を背中に縛り上げられながら、Marie Antoinette は落ち着きはらって足取りも確かにあらわれる。その瞬間を描いた Cain の画に見る彼女の姿には、昂然として、物見高い群衆などまるで目に入れないその面目、躍如たるものがある。最後まで精神の強さを失わぬその姿には、圧倒的な力がある。

だが20数年前の春、彼女がウィーンからはるばる旅路を辿ってパリに乗りこんできたときの、人々の歓呼に包まれた煌びやかな鹵簿にくらべて、これはまた何と傷ましい行列であろうか。David がその道中の彼女を街角ですばやくスケッチした有名な絵は、すばらしい出来である。このスケッチの彼女は、牢獄内の辛苦で、在りし日のあでやかな色香は失せ既に老境にはいった婦人に見えるが、そこには目前に迫る死を超越した悟りの心境

もうかがえるし、残忍な凶器を物の数ともせぬその最後の決意のほどがよく認められる。

やがて広場に着き、最期の祈りがすむと、ギロチンの上に導かれた。その足運びはまことに確かで、従容自若としていたといわれる。

12時15分、斬首台の大きな斧刀は彼女の上に鋭く落ちた。はかない終焉である。

Die Henker fassen sie rücklings an, ein rascher Wurf auf das Brett, den Kopf unter die Schneide, ein Riß am Strang, ein Blitz des niedersausenden Messers, ein dumpfer Schlag und schon packt Samson¹⁾ an den Haaren ein entblutetes Haupt und hebt es sichtbar empor über den Platz. Mit einem Stoß rettet sich jetzt das atemstockende Grauen der Zehntausende in einen wilden Schrei. «Es lebe die Republik!» donnert es wie aus einer von rasendem Würgen befreiten Kehle. Dann zerstreut sich beinahe hastig die Menge ... Es ist Mittag. Die Menge hat sich zerstreut. In einem kleinen Schubkarren fährt der Nachrichter die Leiche weg, den blutigen Kopf zwischen den Beinen. Ein paar Gendarmen bewachen noch das Schafott. Aber niemand kümmert sich um das langsam in die Erde sickernde Blut, der Platz wird wieder leer. (S. 550)

きわめて簡勁な描写のうちに、恐怖政治下の断頭台の無慙な響きと真昼の広場の息苦しいどよめきとが、身にしみて感じられる。

だがフランス大革命の中にあつて、このような最期を遂げた者実に数千名。Marie Antoinette もその内の一人にすぎない。美しかったフランス王妃の死刑は特に後世多くの紅涙をしぼり、革命否定思想の情緒的基盤になったというが、しかしながら、それらは概して単なる感傷の域を出ないであろう。

それでは、この最後の簡潔な死の表現が、このように胸をゆすぶる事由は何であろうか。Zweigによれば、歴史上の大きな行為や事件には、また

偉大な語り手や空想ゆたかな創造的な演出家がともなわねばならぬ。ある出来事をたしかに保ってゆくにはただ一つの方法があるのみ、すなわちそれを詩的な歴史に高めるという一事である²⁾。Zweigにより再現された Marie Antoinette の生涯は、まさにこの観点において詩的に高められた歴史というべく、その故にこそ上の描写も見事に生きているのだ。この作品のうちに Marie Antoinette の姿を追わんとする所以である。

Zweigによれば、その評論集《Zeit und Welt》の中の《Die Geschichte als Dichterin》という講演において述べられているように、世界史なるものは、10枚中9枚の割で朽ちはてている手稿で、その幾百頁かは判読できるが幾千頁かは湮滅しており、つなぎ合わせ空想で補うことによるのみ、まともな姿にまとめることができるものである。詩人はその個所に食いこんでゆき、自分がこうと思う歴史の意味から、欠けているところをファンタジーによってうまく結びつけようとする。無論彼がそれを試みる場所は、Dichterin としての歴史が完全には詩作しなかった曖昧な個所でなければならず、たとえば、オルレアンの乙女を火刑台で死なせる代りに戦場で命を落とさせた、Schiller の思い切ったやりかたなどは、Zweig にとっては最早考えられないところである。《伝記小説》(biographie romancée) —《Marie Antoinette》もこのジャンルに属する一においても、実は本当の意味で歴史に忠実な記述が求められるが、それはどんなつくりごとをも決して取り上げようとはしない記述であり、確かにあるものだけを解明するものでなければならぬ。その際歴史を深く理解したいと思う者は、広い意味でのすぐれた心理学者でなければならず、特別な耳の傾けかた、秘密の中に聞き入る力をもつこと、歴史の真実を見分ける活眼をそなえることが必要である。歴史的なものの中には、一回的で唯一つの明白な真実など殆んどないのであって、数多くの、相異なる報告、とらえかた、また伝説が、それぞれの重要な出来事のまわりに群がっているのだ。真実というものは、大抵幾重にも層をなしている。歴史の真実を伝える公正証書というようなものは存在せず、歴史はある程度までは常にどこかしら創作されたものと言わざるをえない。単に素材を集めるだけでは矛盾が生まれるばかりで、詩人としての素質を僅かばかりもっていないよ

うな人間は、到底歴史の心髄には触れることができない。世界史の中でもしも面白くない箇所があるとすれば、その原因は歴史自体にはなく、記述する人間の側にこそある、と言えよう。真実めざめている目で歴史の中をのぞきこむならば、少なくとも詩人にとっては、全然面白くない人物や事件などは存在しなくなる。あえて言うことを許されるなら、歴史なるものは元来は存在しないのであって、前述の意味における語り手の技術により、叙述者のすぐれた空想力によってはじめて、単なる事実が歴史となってゆくわけである。このことから、本来偉大な現象とか、本来卑小な現象とかはないと言うこともできるわけである。

さてこの伝記小説において、作者の才能は充分に発揮されているが、その際作家としての素材処理にあたって、まず厩大な資料の丹念な渉獵と、それらの取捨選択に関して批判的で厳正な態度が一貫して堅持されたことは、読者に納得のゆくかたちで、《Nachbemerkung》に作者自ら示しているところである。またそのことが、この作品を、いわゆる歴史的記録としても信頼度の高いものにしたといえることができる。

上の参考書類の搜集に関しては、単に、彼自身の入手になる書物のはいった木箱が彼の家にもちこまれたばかりでなく、更にまた、もはや直接手にはいらなくなった文献は、さまざまな国の国立図書館や文庫などから彼のもとに送られてきたのであった。これらの資料の厩大さは、文献蒐集にたいする Zweig の日頃の驚歎すべき態度に想いいたれば、容易に想像のつくところである。さらにこの材料の処理に当り、彼は原稿鑑別の達人として、当該文献内の偽作の洪水から真正のもののみを選び分ける眼識を確実にそなえていた。そしてここにおいて彼は、このヒロインにまつわる世間の無責任な極端な毀誉褒貶の中間に立って、真実への道を見いだし、その真の弁護人となるよう要請されているのだという思いを、いよいよあらたに強くしていったのである。

こうして《Marie Antoinette》においては、ヒロインの運命によせる大きな共感を基盤とした、人間 Zweig の個性が明らかに反映しているのだが、しかもまた Marie Antoinette は、このすぐれた作家の手を通して歴史となった Marie Antoinette 自身にほかならず、この彼女自身の

姿こそが読者の心をとらえるのである。

未来のフランス王妃、オースタリー・ハプスブルク家の王女Marie Antoinetteが、ルイ15世の孫である年少のフランス王太子（のちのルイ16世）の、政略による花嫁として、Strasbourgでブルボン家に引渡されたのは、彼女がまだ15才のときであった。この場面の劇的な目撃者としては、当時同地に遊学中のGoetheが引き合いに出されている。この若き天才はその際、王女迎接のため設けられた幕営を壮麗に飾るゴブラン織の上に、ある悲劇的な結末を告げる神話中の結婚の図が描かれているのに恐懼をもって気付き、この目もあやな織物の中に、既にして後年の《悲運の黒い糸》を見てとっていたのである。Goetheは興奮し次のように大声で叫んでいる。

Was, ist es erlaubt, einer jungen Königin das Beispiel der gräßlichsten Hochzeit, die vielleicht jemals vollzogen wurde, bei ihrem ersten Eintritt so unbesonnen vor Augen zu führen? (S. 24)

また結婚証書の署名に当たっても、不吉と看做しうるようなことがあらわれる。

... noch heute sieht man auf dem verblichenen Pergament die stolpzig und ungeschickt hingesezten vier Worte : Marie Antoinette Josepha Jeanne, von der Kinderhand der Fünfzehnjährigen mühsam hingekritzelt, und daneben—abermals raunen alle : ein böses Omen—einen mächtigen Tintenkleck, der ihr und einzig ihr allein von allen Unterzeichnern aus der widerstrebenden Feder spritzt.
(S. 31)

これらを単なる偶然として一笑に付すのは、実はさほど容易でない。Zweigの描く運命の大きな手のこのような悪戯を、まずそのまま信じてか

かるのが、その文学の味読にいたる大道である。

さてこの異国出身の王太子妃が大きな役割を演ずべき宮廷は、その壮大華麗な外観のみ見れば、かの太陽王 (le roi-soleil) と称されたルイ14世のブルボン王朝最盛時と異なるところがない。しかし Zweig は、その実質において、当時のフランス宮廷がかの光輝ある時代のそれとは如何に隔たり大きいものであるかを、つぶさに記している。ルイ14世がかつてヨーロッパの《Forum Maximum》と考えていた Versailles は、ルイ15世の治下では、もはや単なる《貴族の素人役者たちの社交劇場》に成り下がってしまっていた。そしてこの人工をつくしてきらびやかな、嫉妬と中傷の渦巻く頹廢した世界の中に、一人の天真爛漫な稚い王女が無邪気に跳びこんでくるのである。

この宮廷における生活の当初において、Zweig によればきわめて重大な影響を世界史的に及ぼしたのは、王太子が7年間にもわたり——この間に彼は王位に就く——結婚生活において真の男性たりえず、したがって、あとつぎを作るというその義務を全く果しえなかったことである。結局これは最後に、診断によって、《器官上の欠陥》にもとづく夫の不能が因をなしていることが判明するにいたる。原著には、ここで、それに関する《スペイン大使秘密報告》なるものがスペイン語の原文のまま出ている。さすがに Zweig 自身も、この医学的説明のそのままの訳出は遠慮したのだろうが、これによれば、ルイは、本来は些細な欠陥のため、たとえ欲望に駆り立てられることがあっても行為には及べなかったことが明らかである。いずれにせよ、このような状態が7年間も続いたというのだから、まったく啞然とする事実ではある。生の喜びに浮き立つ乙女が、いかにまだ年少とはいえ、結婚後かくも長期に及び意に反して《むすめ》であり続けたということは、もともと平凡でまことに女らしい女であった彼女の心をして、華やかな社交界に君臨する最高の身分の者として、いわばその代償に、いまや一路たあいない、しかも莫大な浪費をとまなう遊びや気散じのたぐいを求めさせることとなった。そしてこうした傾きは加速度的に抑制のきかぬものになるのだが、しかもそれにたいして、性的不能者として自信を失った夫は当然まったく無力である。ここに漸く、専制政治末期の腐

敗の汚辱に浸る宮廷内外の目は、鋭くこの乱脈の生活に向けられ、王妃に、またひいては国王自身にたいしても、誹謗、讒構、憎悪の聲が次第に高まってゆくことになるのであって、一度立ちのぼった悪意の炎は、ついに再び完全に消え去ることがない。作者 Zweig の見るところによれば、この挿話こそは、他のあらゆる事件以上に強力に王権を内部から破壊したもので、王国の権威の明らかな失墜は、かの7月14日の Bastille 襲撃に端を発するのではなく、実は、この燦然と輝く Versailles 宮殿内奥深くにおいて始まったのである³⁾。

王妃 Marie Antoinette の姿影は、没落してゆくロココをまさしく人格化したものといえることができる。彼女は、軽佻浮薄な時代精神に完全に関係し交渉することによって、まさに18世紀の典型的な代表者となったのだ。古代文化のこの洗練しつくされた繊細きわまる開花ロココ、華奢で遊惰な手と、遊びほうけ甘やかされた心をもつこの世紀は、その喪亡に先立って、一個の人間の形姿のうちに自らを集約的にあらわそうとした。まこと一女性、一王妃の姿にのみこの文化は具象的に鮮かに映りえたのであって、若き王妃は、まずこの世界において残すところなく自己を生かききった。彼女のうちにおいて18世紀は完成し、彼女とともに18世紀は終止符を打ったのである。

芸術家たちがあらゆる形、あらゆる言葉で讚美し、大理石像に、テラコッタに、素焼の像に、パステル画に、象牙の小像に、また優美な詩歌に写しあらわすために競い合ったこの王妃の姿を、しばらく直接 Zweig の筆に眺めてみよう。

Zart, schlank, anmutig, liebreizend, spielerisch und kokett, wird die Neunzehnjährige von der ersten Stunde an die Göttin des Rokoko, der vorbildliche Typus der Mode und des herrschenden Geschmacks; wenn eine Frau als schön und anziehend gelten will, bemüht sie sich, ihr ähnlich zu sein. Dabei hat Marie Antoinette eigentlich weder ein bedeutendes noch ein besonders eindrucksvolles Gesicht; ihr glattes, feingeschnittenes Oval mit kleinen pikanten

Unregelmäßigkeiten, wie der habsburgischen starken Unterlippe und einer etwas zu flachen Stirn, bezaubert weder durch geistigen Ausdruck, noch durch irgendeinen persönlich-physiognomischen Zug. Etwas Kühles und Leeres wie von glattfarbenem Email geht von diesem unausgeformten, noch auf sich selbst neugierigen Mädchen- gesicht aus, dem erst die späteren fraulichen Jahre eine gewisse majestätische Fülle und Entschlossenheit hinzutun. Einzig die weichen und im Ausdruck sehr wandelhaften Augen, die leicht in Tränen überströmen, um dann sofort wieder in Spiel und Spaß aufzufunkeln, deuten auf Belebtheit des Gefühls, und die Kurz- sichtigkeit gibt ihrem seichten, nicht sehr tiefen Blau einen schwim- menden und rührenden Charakter; nirgends aber zeichnet Wil- lensstraffheit eine harte Charakterlinie in dies blasse Oval : man spürt nur eine weiche, nachgiebige Natur, die von Stimmung sich führen läßt und, durchaus weiblich, immer nur den Unterströmungen ihres Empfindens folgt. Dieses Zärtlich-Anmutige ist es auch, was alle an Marie Antoinette vor allem bewundern. Wahrhaft schön ist an dieser Frau eigentlich nur das wesentlich Weibliche, das üppige, vom Aschblonden ins Rötliche schimmernde Haar, das Porzellanweiß und die Glätte ihres Teints, die füllige Weichheit der Formen, die vollendeten Linien ihrer elfenbeinglatten und zart- runden Arme, die gepflegte Schönheit ihrer Hände, all das Blü- hende und Duftende einer erst halb aufgefalteten Mädchenschaft, allerdings ein zu flüchtiger und sublimierter Reiz, als daß er sich aus den Nachbildungen ganz erahnen ließe.

Denn auch die wenigen meisterlichen unter ihren Bildern ent- halten uns noch das Allerwesentlichste ihrer Natur vor, das Aller- persönlichste ihrer Wirkung. Bilder vermögen fast immer nur die erzwungene starre Pose eines Menschen festzuhalten, und der ei- gentlichste Zauber Marie Antoinettes beruhte, darüber ist nur eine

Stimme, in der unnachahmlichen Anmut ihrer Bewegungen. Erst in der belebten Haltung enthüllt Marie Antoinette die eingebo-rene Musikalität ihres Körpers ; wenn sie auf feinen Fesseln hoch und schlank durch das Spalier der Spiegelsäle schreitet, wenn sie sich kokett-nachgiebig in einem Sessel zum Plaudern zurücklehnt, wenn sie ungestüm aufspringt und beschwingt über die Stufen läuft, wenn sie mit natürlich anmutiger Geste die blendend weiße Hand zum Kusse darreicht oder zärtlich ihren Arm um die Taille der Freundin legt, wirkt ihre Haltung ohne jede Anstrengung vollendet aus weiblich-körperlicher Intuition. «Wenn sie sich aufrecht hält», schreibt ganz trunken der sonst kühle Engländer Horace Walpole, «ist sie die Statue der Schönheit, wenn sie sich bewegt, die Grazie in Person.» (S. 102—104) 下線は筆者。

Marie Antoinette が夫から贈られた Petit Trianonは、Versailles宮の庭園の片隅にある小さな館だが、10年以上もの間彼女の無為の生活を楽しませその心をしっかりと擱んでしまったもので、この王妃にふさわしいロココの精髓ともいうことができる。フランスの趣味が編みだしたうちの最も魅惑的な玩具の一つであり、繊細な線と完全な均斉をそなえた宝箱であった。彼女は確かな趣味から、くつろいだ気分を出すように設計された内部の部屋に、けばけばしいもの、豪華なもの、高価なだけが取柄であるようなものは一切もちこんでいない。すべては、精妙に、明るい控え目がちな調子でととのえられている。もっとも目立たない形の中にもっとも優秀な材料を用い、一見こわれやすそうでありつつ実は堅牢で、そこには古代の線とフランス的な優雅との見事な結合が見られる。今日のわれわれにも違和感をまるで覚えさせないこの様式こそは、当時フランスにおける最も洗練され最も趣味ゆたかな女性であった Marie Antoinette の、女性としての勝利を示しており、その親しみやすさと音楽性によって、前代の豪華華麗な趣味に取って代っている。

Der Salon, in dem man plaudert und sich lockerzärtlich unterhält, wird damit anstatt der hochmütig hallenden Repräsentationsräume Mittelpunkt des Hauses; geschnitzte und vergoldete Holzverkleidung ersetzt den schroffen Marmor, nachgiebig glitzernde Seide den drückenden Samt, den schweren Brokat. Die blassen zärtlichen Farben, das matte Creme, das Pfirsichrosa, das Frühlingsblau treten ihre linde Herrschaft an: auf Frauen und Frühling ist diese Kunst gestellt, auf Fêtes galantes und sorgloses Sichzusammenfinden; nicht Großartigkeit ist hier herausfordernd angestrebt, nicht das theatralisch Imposante, sondern das Unaufdringliche und Gedämpfte, nicht die Macht der Königin soll hier betont, sondern die Anmut der jungen Frau von allen Gegenständen, die sie umgeben, zärtlich erwidert werden. Erst innerhalb dieses kostbaren und koketten Rahmens haben die zierlichen Statuetten Clodions, die Gemälde Watteaus und Paters, die silberne Musik Boccherinis und all die anderen erlesenen Schöpfungen des Dix-huitième ihr wahres und richtiges Maß; diese unvergleichliche Spielkunst seliger Sorglosigkeit knapp vor der großen Sorge wirkt nirgends so berechtigt und echt. Für immer bleibt Trianon das feinste, zarteste und doch unzerbrechliche Gefäß dieser hochgezüchteten Blüte. (S. 133) 下線は筆者。

洗練された享楽文化が一邸宅、一個人の形をかりて、芸術として完全な姿をあらわしたのである。しかしながら、あの動乱の時代の真唯中においてこのようなロココのたわむれの魔力の虜になるのは、まことに危険なことではあった。事実、この深淵の上での比類なき輪舞をリードしたヒロインの身の上には、極度の緊張を強いる数々の出来事の火の粉が降り注いでくるのだが、これらの事件の興味深さには、もっとも空想に富んだ小説も及ばぬであろうとさえ思われる。たとえば《頸飾り事件》などは、その最たるものであるとってよい。

この椿事は、要するに Marie Antoinetteが、みずからは何ら関係なく全然知らぬ間に、彼女の名においてある大詐欺事件がおこなわれ、それによって彼女の名誉が徹底的に傷つけられたが、しかもついにそれを雪ぐすべなくして終わった悲劇である。

この戯画の最大の見せ場は、至高の僧位にある Rohan とにせの王妃会見のシーンであろう。

深夜の暗い樹蔭におおわれた《女王の杜》(Bosquet de la Reine)、闇の中の衣ずれの音、王妃をそのままに白モスリンの裳裾を引いた若い娼婦のおののき、王妃にたいする激しい恋慕と大きな野心に胸をはずませた Rohanの跪く姿、その足もとにひらりと落ちた手紙と赤い薔薇の花…

La Motte 夫妻は、にせの王妃を伴い、ひそかに Versailles のテラスを越えて降りてゆく。闇夜である。人の姿も輪郭ぐらいいしかわからない。あわれな女 Nicole は震えはじめる。不安にあふれつつ、彼女は、自分に話しかけてくるはずの男性に渡さねばならぬ薔薇の花と一枚の紙きれとを、手にもっている。その時、王妃の侍従役を演じて Rohan をみちびいてきた秘書が近づいてくる。突然彼女は前へ突き出される。

... wie vom Dunkel weggeschwemmt, verschwinden die beiden Kuppler an ihrer Seite. Sie steht allein, oder vielmehr nicht mehr allein, denn hoch und schlank, den Hut tief in die Stirn gedrückt, kommt ihr jetzt ein fremder Mann entgegen : es ist der Kardinal.

Sonderbar, wie närrisch sich dieser Fremde benimmt. Er verneigt sich ehrfürchtig bis zur Erde, er küßt der kleinen Dirne den Saum ihres Gewands. Jetzt sollte Nicole ihm die Rose übergeben und den bereit gehaltenen Brief. Aber in ihrer Verwirrung läßt sie die Rose fallen und vergißt den Brief. So stammelt sie nur mit erstickter Stimme die paar Worte, die man ihr mühsam eingetrichtert hat. 《Sie dürfen hoffen, daß alles Vergangene vergessen ist.》 Und diese Worte scheinen den fremden Kavalier maßlos zu entzücken, abermals und abermals verneigt er sich, stottert in offensicht-

licher Beglückung alleruntertänigsten Dank, sie weiß nicht wofür, die arme kleine Modistin. Sie hat nur Angst, tödliche Angst, irgend etwas zu sprechen und sich damit zu verraten. Aber Gott sei Dank, da knirscht neuerdings im Kies ein hastiger Schritt, jemand ruft leise und aufgeregt : «Schnell, schnell weg ! Madame und die Gräfin von Artois⁴⁾ sind ganz in der Nähe.» Das Stichwort wirkt, der Kardinal erschrickt und entfernt sich eiligst in Begleitung der La Motte, indes der edle Gatte die kleine Nicole zurückführt; mit pochendem Herzen schleicht die Pseudo-Königin dieser Komödie am Schlosse vorbei, wo hinter nächtlich verdunkelten Scheiben die wirkliche Königin ahnungslos schläft ... (S. 217—218)

時あたかも、かの Caron de Beaumarchais の、貴族社会の風俗を暴露し痛烈な諷刺を浴びせた《Le mariage de Figaro》が、その上演許可でいやが上にも世間の人気をあおりたてた直後で、上の真夜中の密会などは、まさにこの喜劇の材料をそのまま実証したようなものであった。Marie Antoinette が実際これに関係していたと否とにかかわらず、貴族社会の基盤はここに完全にゆすぶられてしまったのである。さればこそ、《革命の偉人》Mirabeau は、《頸飾り事件こそ革命の序曲だ》と言っているし、Napoleonも、セント・ヘレナに流島中、この奇禍を顧みて、《王妃の死は既にあの時以来である》と書いている。

Stefan Zweig は、上の事件をはじめとして、新しい研究の光を向けて描いている種々の出来事を、すべて全体の歴史と有機的に密接につながる一環として眺めることに終始した。彼はこの観察の線を、629頁に及ぶ作品の経過の中で一度として中断していない。この伝記の中で非常に大きな比重を占めている、数多くの私生活の秘密の真相を明かすことも、ただただ、全体とのそれらの重大な連関にスポットを鋭く当てることに、その目的があった。だから読者には、その一つ一つは、あるいは見かけ上取るに足りないものようでありながら、しかし次第に積重ねられてゆくこれらの事件が、大河に次々と注ぎこむ数多の支流のように、ついには抑えがたく

危険なものとしてゆくさまが、よく見てとれるのである。読者は、避けられない運命をその萌芽のうちに認め、ヒロインの無知の前に震えざるをえない。このMarie Antoinette の、ロココに耽楽するしなやかな足は、彼女がのちに明らかな自覚に達してみずからの義務にめざめた存在となり、ついには毅然として死の道に就くときまでは、ただ無心に踊りつづけるのだが、読む者は、たたみかけるようなテンポの早い文体を媒介として、作者とともに、この踊り手の足下に顫える床のあらゆる嘆息を身にしみて感じるのである。

だが、さきの引用文にもあった、気分左右され、つねに感情の底流にのみしたがう、まったく女らしい従順で御しやすい性格の持主、この雅やかな趣味の生活に耽溺する彼女にも、ついに覚醒の転機が到来したのである。この女性の浮き立つ心は、周囲の世界に、彼女自身によってつらされた不穏の空気がその目にも十分顕著になったとき、ついに深い落ち着きを得るにいたったが、はげしい苦難に遭遇し、《運命》の巨大な力として、彼女の本質の眠れる可能性が突如めざめたこの人間的な成長に、作者は惜しみなき共感をよせている。《Erst im Unglück weiß man wahrhaft, wer man ist.》と述べ、生涯の最後の時期に、その悲劇にふさわしく、己れの運命と同じように偉大となった《平凡な》女性のこの人間的発展は、そのこれまでの起居をよく知っているだけ、一層強い感動にみちびくものである。このひどい艱苦によってこそ、自分の小さい凡庸な一生が後世のため受難の実例として残るのだという予感が、彼女をおそう。こうして高い義務を意識しながら、彼女の性格は自己の限界を越えて成長する。永遠の生命を宿すべき一個の芸術品が、現し身のくずれ去る直前に完成したのであった。

この魂の発展は、スエーデンの貴族 Hans Axel von Fersen にたいする関係において、もっとも見事にあらわれている。二人の男女が相求め、多年にわたる試練をへた紛れようもない感情に、全身をあげて自由にしたがう。この真剣な愛によって高められた魂は、死ぬときまで互いに強く保ちつづけられる⁵⁾。

Fersen は、愛のためには恐れを知らず、誠実無類である。彼が王妃に

はじめて全霊をあげての愛をささげるにいたったのは、彼女が世をあげての非難、迫害の矢おもてに立たされたときであり、すべてが彼女を見捨て彼女がいっさいを失うという、まさにその瞬間に、王妃は全生涯にわたって空しく求めつづけていたもの、誠実にして勇気をそなえた男を見いだすのだ。Fersen は妹に書き送った打ち解けた手紙の中で、自分の心の秘密を解く鍵を、包みかくすことなくさらけ出している——

Ich habe den Entschluß gefaßt, niemals ein eheliches Bündnis einzugehen, es wäre unnatürlich... Der Einzigen, der ich angehören möchte und die mich liebt, kann ich nicht angehören. So will ich niemandem gehören. (S. 283)

1791年6月国王夫妻の国外逃亡計画は挫折し、Varenes で捕えられた王妃は、パリに連れ戻されたのち、傷心の極のうちに、Fersen 宛情愛を傾けつくした手紙を書く——

Ich kann Ihnen nur sagen, daß ich Sie liebe und habe selbst dafür kaum Zeit. Es geht mir gut, haben Sie um meinetwillen keine Sorge, ich wüßte nur gern von Ihnen das gleiche. Schreiben Sie mir chiffriert, lassen Sie die Adresse von Ihrem Kammerdiener schreiben ... Und sagen Sie mir nur, an wen ich meine Briefe an Sie adressieren soll, denn ich kann ohne das nicht mehr leben ... (S. 390)

《Ich kann ohne das nicht mehr leben.》—— このように熱烈な叫びが、かつてこの王妃の口からもれたことはなかった。彼女に本当のよりどころとして残されているのは、いまやこの愛のみである。そしてこの感情が、己れの生命を、すべてに耐えてまもる力を彼女に与えてくれる。

1792年2月13日、長い間をおいて待ちわびた再会のこの日の夜は、二人にとっては、共に過ごす最後の一夜となる。その日彼は、みずからの一命を

賭けて異国からパリに帰ってきた。彼は、フランスで当時その首に最高の価値をつけられている者として、革命史全体を通じもっとも大胆な企ての一つを実行すべく乗りだしたのであった。この運命的な夜に、彼が王妃の部屋の中ですごしたことは、疑いをいれない。そして彼が、もし仮にこれまで Marie Antoinetteとの間に交わりをもたなかったとしても、このかけがえのない最後の夜には、かならずやその真の恋人になったであろうことは間違いない。

翌日の夜半まで Fersen は宮殿 (Les Tuileries) にとどまっている。そしてついに、この30時間のうちで一番つらい瞬間がやってくる。彼らは別れを告げねばならない。

Beide wollen sie es nicht wahrhaben, beide ahnen sie untrüglich: Nie mehr! Nie mehr in diesem Leben! Um die Erschütterte zu trösten, verspricht er ihr, wenn es irgend möglich sein sollte, wiederzukommen, und fühlt beglückt, wie sehr er sie beruhigt hat durch seine Gegenwart. Durch den dunklen, glücklicherweise verlassenen Gang begleitet die Königin Fersen bis zur Tür. Noch haben sie einander die letzten Worte nicht gesagt, noch die letzten Umarmungen nicht getauscht, da naht fremder Schritt: Todesgefahr! Fersen, in den Mantel gehüllt, die Perücke aufgestülpt, schlüpft hinaus, Marie Antoinette flieht in ihr Zimmer zurück; die Liebenden haben einander zum letztenmal gesehen. (S. 412)

この簡潔な筆致は、別れの悲しみをつたえて痛切であり、深い感銘を与える。こののちついに再会の機会を得ない彼女には、Fersen の紋章と、《Tutto a le mi guida》という刻銘のついた指輪——これは、のちに彼女が Fersen に死の牢獄 Conciergerie から送るのだが——とが、その暗黒のかなしみを、《不滅の愛》の輝きをもって照らすのである。

革命という概念は、たえまなく推移してゆくその段階に応じて、最高の理想追求から文字どおりの残虐行為にまで及ぶものである。どの革命にも認められることだが、フランス革命においても、純粋な理想から革命を奉

じた者と、怨恨からそれに走った者との、このふたつのタイプの革命家が、きわだった対照を見せてあらわれている。このうち久しく不遇の境にあった後者は、これまで自分を抑圧し自分より上の暮しをしていた連中にたいする報復の念に燃え、彼らにたいして、獲得した新しい権力を存分に揮ってみようとする。フランス革命においては、最初は理想追求が優位を占めていたが、解放された大衆は、やがて解放者たるブルジョアジーにも立ち向かうようになる。革命の第二段階においては急進的な分子が政権の座にのぼり、権力を思うさま享受したいという欲望にとりつかれた彼らの野心は、革命をみずからの精神の凡々たる水準にまで引きさげてしまう。

革命とはすべて、先へ先へところがってゆく玉のようなものである。革命を統率し、将来もその指導者でありたいとのぞむ者は、他におくれを取ることを極端におそれ、息つく間もなくころがりつづけてゆく。穩健と看做されることへの恐怖が革命を駆り立てて、その本来の目標を遙かに遠く乗り越えさせてしまう。みずからの設定したあらゆる休止点を突き倒し、目標に達するやいなやそれを更につり上げてゆくのが、革命の宿命といえるのであろう。

92年8月国王一家はチュイルリー宮殿から<<監獄>>Templeに移転、やがて王の処刑。そして93年8月はじめには、Marie Antoinette が単身 Conciergerie に移され、ここで最後の日々をおくることとなる。

パリの町にはいたる所に革命の記念物があるが、この地下牢と Place de la Concorde ほど無慙な記憶につながるものはない。コンコルド広場は今では繁華の中心地となっているが、革命盛時には断頭台が立っていて、名も革命広場とよばれ、国王、王妃、Robespierre 等々、その他無数の首が続々断たれていったのである。

さて Conciergerie は現在公開されているが、Marie Antoinette の独房もその中に残されている。まことに陰鬱な小さい長方形の部屋で、高いところに小窓がひとつ付いている。今はとなりの室とつづいているが、当時は壁で仕切られ、広さも半分ぐらい、今よりも更にはるかに暗かったという。Venezia の有名な Palazzo Ducale裏の囚獄も、宮殿の華麗さとはまったく対蹠的な、呪いの声と呻きが今も耳に伝わるような、言いえぬ陰慘

な想いに身うちの凍るのを覚えさせるが、それと似て、この華やかなパリの一角を占める地下牢も、暗い歴史を秘め、訪れる者は沈鬱ならざるをえぬ。さて Marie Antoinette の監房は、床は煉瓦敷き、壁も天井も石で、薄黒い。天井からは鉄のランプがひとつ。はじめ彼女はほかの部屋に入れられていたが、いわゆる《カーネーション陰謀》(affaire de l'œillet) 事件があつてのち、9月のはじめごろここに移され、死刑の日の明けがたまでそこにいた。

陽光を遮断された Conciergerie の日々は、Marie Antoinette を老いた病弱の女にしてしまった。ポーランドの画家 Kucharski が描いた地下牢の聖餐式におけるその肖像画を眺め、これを優雅なロココ趣味に囲まれた若き時代のそれらとくらべてみると、この38才の女性の、なお強い信念と誇りとをはっきり偲ばせつつも、そのあまりにも対照的な老いを見すごすことはできない。

Versailles, さらに Trianon のかつての幽婉な女主人も、今は見るもあわれな冷たい石牢におしこめられた身だ。その誇かな意志はギロチンに斃れるまでついぞ屈しなかったが、夫は処刑され、子供たちとは引きさかれ、最愛の人とは心を通わせるすべもない獄中の孤独は、彼女をさすかに、時にあわれな女心に立ち戻らせることもあつたのであろう、やるせない想いを、ピンの尖で紙に穴をあけて書き綴った辞句が、いまでも見いだされる。

Je suis gardé à vue

Je ne parle à personne ...

こうした昼と夜がくり返し続き、そしてついに彼女は法廷に呼びだされた。二日二晩にわたる辛辣な審問の前に、彼女は臆するところなく立ちつづけたが、その態度が常に威厳をそなえて見事であつたことは、史家の等しく記すところである。

処刑を目の前にして彼女が義妹宛にしたために別れの手紙は、実に心憎いまでの落ち着いた力強さにみち、澄明な心の率直なほとばしりが胸を

打つ。ここにあらわれた人間としての発展は、真に目を瞠らせるばかりである——

Dir, liebe Schwester, schreib ich zum letzten Mal. Ich wurde soeben verurteilt, nicht zu einem schmachvollen Tod, der nur für Verbrecher gilt, sondern dazu, Deinen Bruder wiederzufinden. Unschuldiger wie er, hoffe ich ihm in seinen letzten Augenblicken zu gleichen. Ich bin ruhig, wie man es ist, wenn das Gewissen dem Menschen keine Vorwürfe macht. Ich bedaure tief, meine armen Kinder⁶⁾ zu verlassen. Du weißt, ich habe nur für sie gelebt und für Dich, meine gute, zärtliche Schwester. Du, die Du aus Freundschaft alles geopfert hast, um bei uns zu bleiben, — in welcher Lage lasse ich Dich zurück! ... Mögen sie (die Kinder) beide an das denken, was ich sie unablässig gelehrt habe: daß die Grundsätze und die genaue Befolgung der eigenen Pflichten das wichtigste Fundament des Lebens sind, daß die Freundschaft und das Vertrauen, das sie einander entgegenbringen werden, sie glücklich machen wird ... Möge mein Sohn niemals die letzten Worte seines Vaters vergessen, die ich ihm mit Vorbedacht wiederhole: Möge er niemals danach trachten, unseren Tod zu rächen! ...

Ich muß Dir noch meine letzten Gedanken anvertrauen. Ich hätte sie vom Beginn des Prozesses an niederschreiben mögen, aber abgesehen davon, daß man mir nicht gestattete zu schreiben, verlief er so schnell, daß ich in der Tat keine Zeit dazu gehabt hätte.

Ich sterbe im apostolischen, römisch-katholischen Glauben, der Religion meiner Väter, in der ich erzogen wurde und zu der ich mich immer bekannt habe. Da ich keinerlei geistliche Tröstung zu erwarten habe, da ich nicht weiß, ob es hier noch Priester dieser Religion gibt, und da auch der Ort, an dem ich mich befinde,

sie allzu großen Gefahren aussetzen würde, wenn sie zu mir kämen, bitte ich Gott von Herzen um Vergebung für alle meine Sünden, die ich begangen habe, seit ich lebe. Ich hoffe, daß er in seiner Güte meine letzten Gebete erhören wird so wie alle jene, die ich seit langem an ihn richte, damit meine Seele seines Erbarmens und seiner Güte teilhaftig werde.

Ich bitte alle, die ich kenne, und im besonderen Dich, liebe Schwester, um Vergebung für jedes Leid, das ich ihnen unwissentlich etwa zugefügt habe. Ich verzeihe all meinen Feinden alles Böse, das ich durch sie erlitten habe. Ich sage hiermit den Tanten und all meinen Brüdern und Schwestern Lebewohl. Ich hatte Freunde. Der Gedanke, daß ich von ihnen für immer getrennt bin, und das Bewußtsein ihres Schmerzes gehören zu den größten Leiden, die ich sterbend mit mir nehme. Mögen sie wenigstens wissen, daß ich bis zu meinem letzten Augenblick an sie gedacht habe ... (S. 536—539)

... Marie Antoinette 処刑さるとの報に接して、Fersen のうけた衝撃は、勿論たとえようもない。妹にあてたその手紙において、われわれは最後に彼の呻吟を聞き、ともに苦しまねばならない。

Die mir mein ganzes Leben bedeutete und die ich nie aufgehört habe zu lieben, nein, nie, keinen einzigen Augenblick, und der ich alles, alles geopfert hätte, sie, von der ich nun erst wahrhaftig fühle, was sie mir war, und für die ich tausend Leben gegeben hätte, sie ist nicht mehr. Oh, mein Gott, warum mich so strafen, wodurch habe ich deinen Zorn verdient? Sie lebt nicht mehr, mein Schmerz hat seinen Höhepunkt erreicht, und ich begreife nicht, wieso ich selber noch lebe. Ich weiß nicht, wieso ich noch meinen Schmerz ertrage, denn er ist maßlos und wird nie erlöschen

können. Ich werde sie immer in meiner Erinnerung gegenwärtig haben, um sie zu beweinen. Meine teure Freundin, ach, warum bin ich nicht an ihrer Seite gestorben, für sie, an jenem 20. Juni⁷⁾, ich wäre glücklicher gewesen, als jetzt mein Leben in ewigem Leid dahinzuschleppen, mit Vorwürfen, die erst mit meinem Leben enden werden, denn nie wird ihr angebetetes Bild in meiner Erinnerung vergehen ... (S. 553—554)

18年後、Fersen は、Marie Antoinette の思い出に愛をもって結ばれていた最後の人物として、この世を去った。

史上に名高い人物でありつつ、その名を冠したすぐれた文学作品の主人公としては従来あまりとりあげられなかった Marie Antoinette は、Zweig のこの作品によって、文学史の中にもその名を長くとどめるものとなった。作者の、深層を抉る心理学的手法によって、このヒロインにまつわる無数の事柄は熟撰のうえ歴史となり、ここにまことに興味あふれる伝記小説が生まれたのであった。

その際真実を求める者がとるべき最上の策として、彼は王妃側近のすべての傀儡的な者どもを、そのあまりにもお誂え向きの記憶のゆえを以て、はじめから信用のおけない証人として、裁きの場より退廷を命じておいた。そして本書にたいするもっとも重要な文献としての、諸々の書簡類の評価についてとられた心理学的原則は、うたがわしいものを数多く用いるより少数でも本物を、ということである。きわめて多数の資料を扱いながら、それらに決して引きずられることのない確乎とした執筆者の姿勢は、読む者をして十分に納得させるが、作者自身の言葉は、如上の原則を基底として、作家としての Zweig の、歴史にたいする根本的な態度をあらわすものと言うことができる。すなわち彼によれば、肉眼による検証に厳しくしぼられた研究が行きづまりになるところで、心眼の観察という自由奔放な方法が始まる。古文書学が用をなさないところで、心理学はその真価を発揮しなければならない。心理学によって論理的にかち得られた結論は、書類や

事実の語るむきだしのまことよりも、しばしばより真実に近い。透徹せる感情は、一個の人間について、あらゆる記録以上に、ほとんど常により多くを知っているのである。(S. 290)

彼は本書の《Nachbemerkung》の中で、このことに関連して更に言う。神に祭りあげるのではなくて人間を人間らしくすること、これがすべての創造的な心理学の最高の法則である。牽強附会の論拠によって弁明をするのではなくて解明すること、これがかの心理学に課せられた使命である。(S. 563) これらの見地から彼は、Marie Antoinetteの生涯におけるまったく私的であると考えられるもの——全体との関係において、このまったく私的なものがその後もつにいたった重大な結果に照らして——に、従来の見方に反して特に必要な場を認め、まさにそのことによって、この女性の姿を、読者にたいし、人間として深く共鳴せしめうるものとして再現してみせたのであった。深い心理解剖はここでも作者のもっとも得意とするところだが、淀みのない確実で小気味のよい文体、それがこの作品の魅力を一段と大きくしていることは言うまでもない。

あるいは、歴史を扱う Zweig の操作に心理学(とくにフロイト流の)偏重の印象をうけ、これに抵抗をおぼえる向きもあろう。先述のごとく、Hermann Kesten なども、この作品を目して、精神分析学の講義だと言っているのである。しかし Zweig としては、歴史解明の手段として心理学を一旦えらんだ以上、この方法をどこまでも忠実に推し進めたのは当然の理であろうし、いま上のような抵抗を一応認めるとしても、同様の素材からでも、この作のヒロインとはまるで性格の異なるさまざまな人間像の生まれうる可能性を考え、これらと比較するとき、この Zweig の Marie Antoinetteこそは、彼女の真の姿に迫りこれを解きあかすものだろうという予感を、充分人に懐かせる。こうして、読者の心をとらえる歴史が描かれたということが出来る。そして、彼女自身ならびにフランス革命にまつわる事どもが、現地において生き生きとした言葉で語りかけてくるのであって、《伝記小説》の妙味もまたここにありと言うべきであろう。

さて終りに、この著作《Marie Antoinette》からの引用文には、その

おのおのの末尾の括弧内に原典所載の頁数を記しておいたが、これは使用テキスト Stefan Zweig: Marie Antoinette, Bildnis eines mittleren Charakters, S. Fischer Verl. 1951 内のそれによる。なお、このテキストには、既述のように、スペイン語で書かれた個所があり、三品 守氏のお助けを得て理解した。参考文献としては、特に Friederike Zweig や Hans Arens のものなどをあげておきたい。またフランス革命については数多の文献を広く参照したが、それらの書名を一々つらねることは控えさせていただく。なお序ながら、パリにおいて、ヴェルサイユ、トリアノン、また市内諸所の博物館等で実際に感ずるところ大きかったことも、附言しておきたい。

註

- 1) Samson (1739—1806) は首切り役人。代々ルイ王家に忠誠をつくす家柄の主人で、首切りは三代にわたる家の業であった。ルイ 16 世の刑が宣告されたとき、彼は自らの手で王の首を断つに忍びず革命政府に辞職願を出したが、許されず、やむなくこの任務を果たすことになった。断頭台上におけるルイ 16 世の、国王の名にそむかぬ態度に感動したサンソンは、その処刑後、ひたすら家に引きこもって王の冥福を祈ったという。彼の健康は目に見えて衰え、1795 年ついに職を辞した。
- 2) St. Zweig : Zeit und Welt. Gesammelte Aufsätze und Vorträge, Bermann-Fischer Verlag, Stockholm 1946. S. 356 (《Die Geschichte als Dichterin》).
- 3) Hermann Kesten などは、Zweig のこういった見解に関連して、たとえば次のように述べている。
Aus einer geheimen Prüderie beging er zuweilen eine Schamlosigkeit, wie jene eben darum so populär gewordene Biographie der 《Marie Antoinette》, wo die Französische Revolution, ja die Weltgeschichte als eine Fußnote zu Freuds psychoanalytischen Vorlesungen erscheint. (《Meine Freunde die Poeten》, verlegt bei Kindler 1959, S.146)
この皮肉にも一理あり、首肯せざるをえない。
- 4) Artois 伯はルイ 16 世の弟。

- 5) ルイ16世は、王妃にとって、善人ではあるけれど、無気力な、ただ夫という形ばかりの存在にすぎない。Zweigによれば、彼女が Fersen と決定的な関係にはいったのは、夫との間に4人の子供を生み終えてのちであり、これ以後彼女は王と寝所を共にしない。
- 6) 4人の子のうち2人を病気でなくしていたので、残るは2人(男女1名づつ)。
- 7) 1791年6月20日。Fersen はこれをその生涯における運命の日として、たえず書きとめている。国王一家 Varennes 逃走のこの日、彼は途中王の命令にしたがって Marie Antoinette のもとを離れ、彼女を危険の中に取り残すことになったのである。のち彼も、奇しくも同じ月日に、暴徒の手によって斃れた。不思議な運命の暗合というほかない。

MARIE ANTOINETTE

— Eine Studie zur biographie romancée —

Hiroyuki FUJII

Marie Antoinette lebte und starb dank dem Dichter Stefan Zweig wieder ihr richtiges Leben. Zur Gestaltung dieser Persönlichkeit führte den Autor sein unwiderstehlicher Trieb, über die Unglückliche eine genügende Erklärung abzugeben.

Die Heldin mit einem eigentlich mittleren Charakter lebte zuerst leichtsinnig und genußsüchtig, weil sie an furchtbaren Unterdrückungen des Geschlechtstriebes litt, dann hielt sie, selbst in unglücklichster Lage, bei Verfolgung und unter Bedrohung kraft der Liebe mit knapper Not aus und starb schließlich einen königlichen Tod voll Fassung und Würde. In diesem Werk fühlt man der Königin Unglück und Schmerz wahrhaft mit.

Nach St. Zweigs Ansicht gibt es überhaupt keine Geschichte an sich, sondern erst durch die Kunst des Erzählens; durch die Vision des Darstellers *wird* das bloße Faktum zur Geschichte; jedes Erlebnis und Geschehnis ist im letzten Sinne nur wahr, wenn es wahr-

haft und wahrscheinlich berichtet wird. Diesen ganzen umfangreichen biographischen Roman weben die tiefblickenden Augen des Dichters, der ein inniges Mitgefühl mit der Heldin empfindet. Es wäre nicht so schwer, mittels derselben Materialien auch einen ganz anderen, niedrigen Charakter zu erschaffen. Wir werden eben deswegen auf St. Zweigs gerechte und strenge Behandlung der Materialien und zugleich seine mit Psychologie gewappnete dichterische Schöpferkraft besonders achten müssen.

In «Marie Antoinette» läßt sich die Gesinnung des Autors anschaulich wahrnehmen. Aber die Heldin Marie Antoinette ist doch nichts anderes als sie selbst, nur ist sie zur Geschichte durch eine geniale Dichterhand geworden. Gerade diese Gestalt macht auf den Leser einen unauslöschlichen Eindruck. Sodann greifen ihn geschichtsträchtig Versailles, Trianon, Conciergerie und Place de la Concorde ans Herz. Darin besteht der Zauber der «biographie romancée».